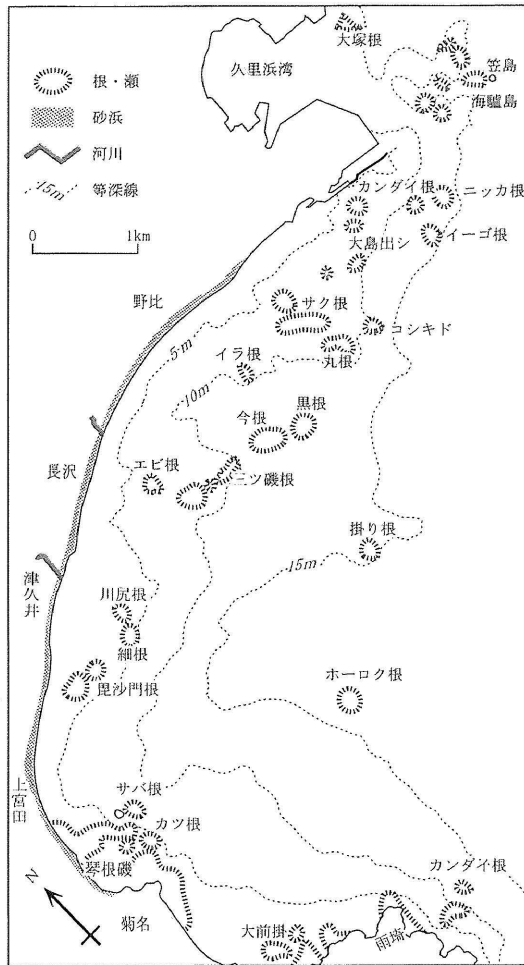


近代三浦半島における生業形態からみた地曳網漁の様相 : 下浦地域を事例として

| | |
|-----|---|
| 著者 | 田村 真実, 吉田 国光, 市川 康夫 |
| 雑誌名 | 歴史地理学野外研究 |
| 号 | 14 |
| ページ | 145-162 |
| 発行年 | 2010-03 |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/105162 |



第2図 下浦地域における海底地形
(上宮田漁業協同組合提供資料により作成)
注) 砂浜は実際よりデフォルメして表記

類は、集落全体の農業生産と漁獲の関係からなされたものであり、集落内に展開する各世帯の生業形態における農業と漁業の関係については、十分な検討がなされていない。

各世帯の生業形態における農業と漁業の関係を考える場合、生産活動からのアプローチが考えられる。地理学における漁業・漁村研究においては、漁業に関わる空間領域として、生産の場である漁場と漁業者の居住空間である陸上の両面からとらえる必要性が指摘されてきた⁷⁾。河原典史は、漁村の村落構造をとらえるために、陸上域に

おける漁村空間の構成要素として、漁船や漁網などに関する地目や地割、その所有者に着目する必要性を指摘した⁸⁾。また中村周作は、漁業者の日常生活を具現化する場として漁業集落という概念を用い、その地域構造をとらえるための要素の一つとして、生産活動に関わる土地利用とその変化に着目した⁹⁾。半農半漁村における漁場および陸上域の生産活動の関係性を探るために、漁村空間における土地利用の状況を把握し、世帯ごとの土地所有形態を考察することは重要な視点であるといえる。

また漁業の中でもとくに地曳網漁に注目する理由は、砂浜海岸地帯である下浦地域の漁業において重要な位置を占めていたこと、多くの労働力を必要とする地曳網漁の経営そのものに当該地域の生業のあり方の特徴が把握できるためである。例えば、九十九里の漁村における地曳網漁を中心とする一連の研究では、地曳網漁の経営主体である網元が高高持かつ地主であり、村内の有力者であること、労働力が小作層と結びついて編成されていること、網元一水主関係が地主一小作関係と表裏の関係にあることなど、地曳網漁を考察の中心に据えることで九十九里の漁村構造とその特質が明らかにされている¹⁰⁾。地曳網漁の経営組織の性格から、多くの労働力を必要とする地曳網漁が下浦地域において存続しえた背景を考察することによって、下浦地域において営まれてきた生業の特質の一端が明らかになると考えられる。また川崎史彦の地曳網主による水主の飲酒規制についての研究からは、地曳網漁が経済活動のみならず公益的な側面を備えていたことがうかがえる¹¹⁾。このような地曳網漁の性格をふまえ、本稿では地曳網漁の網元世帯ごとの生業形態や土地所有状況に注目する他、地曳網漁の有していた経済的役割の多寡を考慮しつつ検討する。

以上のように本稿では、三浦半島における砂浜海岸地帯の生業の特徴をとらえるために、地曳網漁が昭和30年代まで存続しえた背景を、網仲間の生業と地曳網漁の特色に着目して考察を進める。Ⅱ章では、近代において北下浦村と南下浦村で行

われていた漁業形態の特色と、主要な漁法であった網漁の変遷について提示する。地曳網を中心とする漁業形態の変遷をふまえたうえで、Ⅲ章では南下浦地域の上宮田を事例として、株組織である網仲間を構成する世帯の生業形態と土地所有の具体的様相について検討する。

Ⅱ 下浦地域における漁業と地曳網漁の盛衰

1) 下浦地域における漁業形態の特徴

a. イワシ漁の導入

三浦半島南部の東岸に位置する下浦地域の沿岸および沖合は、浦賀水道の出入り口にあたり、東京湾と太平洋双方の魚類が邂逅し、漁獲対象が多岐に渡る良好な漁場であった。そのために、下浦地域では年間を通じて多様な漁法で、イワシを中心とした多様な魚介類が獲られてきた。

このイワシ漁を中心とした漁業形態は近世以降に発展したものである。下浦地域におけるイワシ漁の定着は、享保年間に徳川吉宗が紀州藩主時に実施した移住政策により、紀州移民が多数定着したことによるものである¹²⁾。徳川吉宗が紀州藩主へ就任後に綿花栽培を導入した際に、肥料として干鰯が大量に使用された。その結果、イワシの需要が増し、イワシ漁を目的に漁民となる者が急増して地先の漁場が飽和状態となったため、過剰な漁民を関東地方へ集団的に移住させ、下浦地域も移住地の一つとなった。現在、三浦市南下浦上宮田に多く存在する松原姓は、紀州移民の末裔といわれている¹³⁾。また高橋恭一は、紀州下津浦に残された過去帳から、関東地方での死亡者が享保年間に圧倒的に多かったと指摘している¹⁴⁾。このことからイワシ漁は、寛永年間にはすでに始められており、享保年間に最も発展したといえる。享保年間の下浦地域において、大量に水揚げされたイワシは加工され、浦賀の間屋を介して、紀伊国屋文左衛門によるミカンを積んだ廻船の帰荷に関西地方へ出荷されたという¹⁵⁾。

このように、近世を通じてイワシ漁は発展してきたが、漁法は一貫したものではなかった。先述

のように、イワシ漁自体は寛永元年(1642)に紀州下津浦の七兵衛、市郎右衛門によって相州三浦郡下浦へ伝来した。当時のイワシ漁の漁法は、旋網漁法の一つであるマカセ網によるものであった¹⁶⁾。安池尋幸によると、津久井村においては寛政9年(1797)に、地曳網が2か統あったと示されており、寛政年間にはマカセ網と地曳網によるイワシ漁が併存していたと考えられる¹⁷⁾。

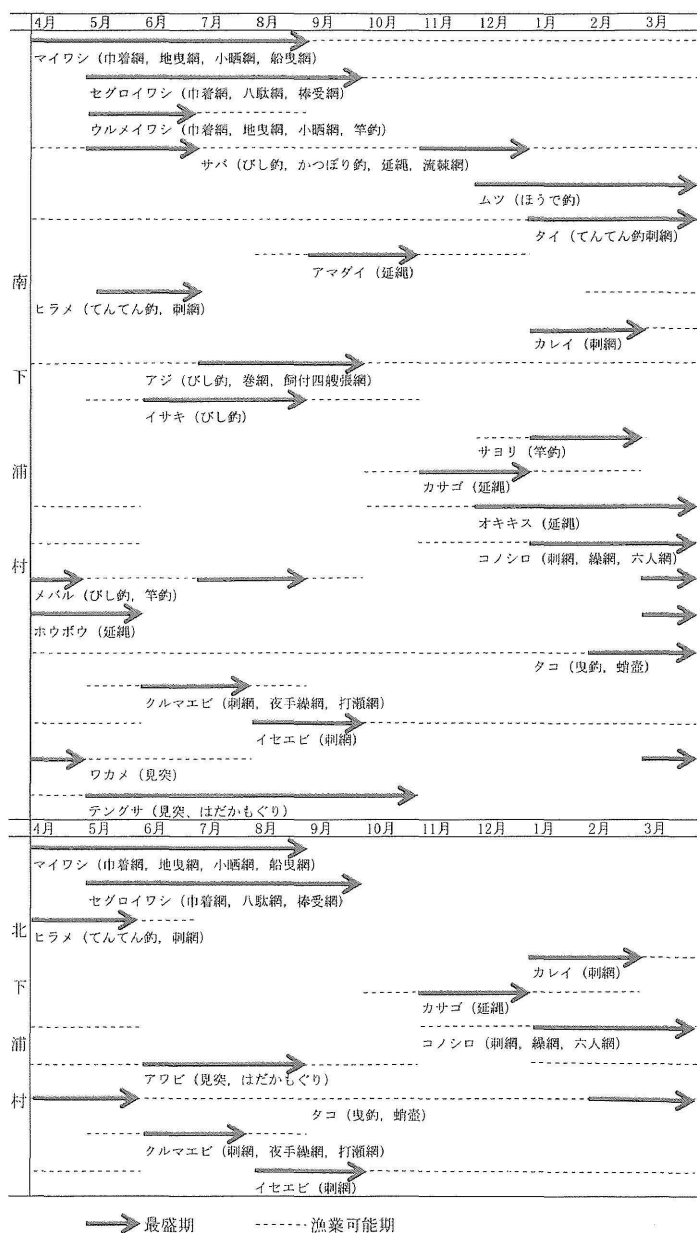
b. 漁業暦

下浦地域において、イワシ漁を中心とした漁業形態は、近代まで発展的に継承されてきた。近代においては第1表のように年間を通じて多様な漁業が行われてきた。さらに、北下浦村と南下浦村においては、海底の地形条件に合わせて、それぞれ異なる漁業形態がとられてきた。

近代における北下浦村では、春から秋までの時期は4月から9月にかけてマイワシを対象とする巾着網漁と地曳網漁、5月から10月にかけてはセグロイワシを対象とする巾着網漁、八駄網漁が行われた。それと並行して、ヒラメ、アワビ、クルマエビ、イセエビを対象とする漁が行われた。秋から春にかけての時期には、カサゴやカレイを獲る延縄漁やコノシロを獲る刺網漁、タコ漁が行われていた。

南下浦村では、春から秋までの時期には、北下浦村と同様に4月から9月はマイワシを対象とする巾着網漁、地曳網漁、5月から10月にかけてはセグロイワシを獲る巾着網や八駄網が行われた。加えて、5月から7月にかけての時期は、ウルメイワシを対象とする巾着網漁と地曳網漁が行われていた。これらと並行して、てんてん釣、びし釣、刺網、旋網、延縄といった漁法によってヒラメやアマダイ、アジやイサキ、エビ類が獲られ、その他、テングサが採藻されていた。秋から春にかけての時期には、ムツ、タイ、カサゴ、カレイ、サヨリ、キス、コノシロ、ホウボウ、タコ、ワカメが水揚げされている。その他2期に渡って、びし釣などによるサバ漁、びし釣や竿釣によるメバル漁が行われていた。

第1表 下浦地域における漁業暦－大正10年（1921）－



(「大正10年三浦郡水産要覧」により作成)

両村を通じて、イワシやヒラメ、コノシロなど漁獲対象が共通するものもみられるが、海底に根の多い北下浦村では、近世より商品価値の高いアワビが獲られた。一方で砂底の続く南下浦村では、地曳網によるものが中心となっていた。また

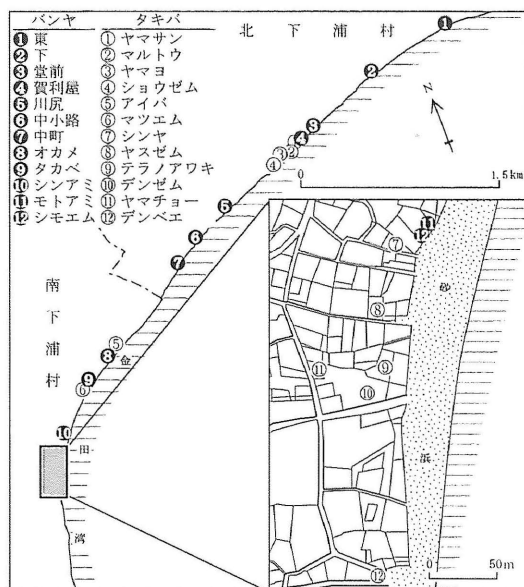
南下浦村上宮田では、漁閑期に廻り船によって横浜や東京方面へ出漁する者もあった。南下浦村は北下浦村に比べて漁業形態が多様であり、漁業の経済的役割が相対的に高かったと推察される。

c. 地曳網漁と巾着網漁の形態

主な漁法である地曳網漁には、大地曳網とゴロタ（ゴサ）網と呼ばれる小地曳網¹⁸⁾、シラス網と呼ばれるものがあつた¹⁹⁾。大地曳網と小地曳網はイワシを主な対象魚種とし、シラス網はシラスと呼ばれるイワシの稚魚を対象としていた。シラス網については詳細が不明であるが、大地曳網に使用する網の長さは200～300mで、小地曳網は大地曳網の約3分の1の大きさであつた。大地曳網漁は、8～15戸で構成される網仲間と呼ばれる単位で行われていた。多くの場合、この網仲間は各世帯が株を持ち合うような形式で組織されていた。一方、小地曳網とシラス網は、各世帯の個人経営であつた。

これらの地曳網漁のうち、大規模な大地曳網漁を行う際には、見代とトモドリ、押代、漕代、曳代と役割が分担されていた。見代は各系統で所有するバンヤと呼ばれる見張り小屋で、浜からセリと呼ばれる魚群を探す作業を担った（第3図）。このバンヤは、網などの漁具を保管する倉庫や、若者の社交場としての役割も有していた。見代は海面の色や、波の音、そして匂いからセリを感知し、見つけるとホラ貝を吹いて周囲に知らせた。セリの感知は経験則に依るため、見代に就く者はその技術を有するものに限られていた。さらにホラ貝の調律は各系統によって異なり、網仲間は、セリの到来に際して音色を聞き分けて、農作業等を中断して漁に従事した。そして、押代が砂浜から海へ船を押し出し、漕代がその船に乗り込み、セリを覆うように網をかけ、浜辺で待つ曳代がその網を引いた。

出漁する船は、指示を出しながらセリを追い込む手船と、網をかける網船の2艘であつた。手船は網船の約4分の1の大きさで、指揮をとるトモドリが1人と漕代が1人乗り、網船には漕代が4人以上乗った。トモドリはその役割から機動力と統率力を求められ、高齢の熟練者がトモドリとなった。網船は対象魚種であるイワシの回遊ルートと習性から、必ず南から北へ向かって網をかけた。網の長さは約200～300mで、魚を受ける袋の



第3図 下浦地域におけるバンヤとタキバの分布
—大正～昭和戦前期—
(横浜地方事務局横須賀支局所蔵「土地台帳附属地図」および聞き取り調査により作成)

部分が約10mで、網にアバと呼ばれる浮きと、イワと呼ばれる錘がつけられた。また、北下浦村においては、地先の海底の所々に根や瀬があり、根や瀬に網がかかると、潜って外していた。網の外し手は漕代の中で、潜水を得意とする特定の数人が務めていた。

このような大地曳網漁での見代とトモドリ、押代、漕代は網仲間の各世帯が担い、曳代は網仲間に関係なく参加できた。先述のように、見代とトモドリは熟練者によって担われたが、押代では男女問わず就くことができた。漕代については男性であつたが、必ずしも若年者ではなく、櫓を上手く漕げる高齢者の方が多かった。さらに曳代については、1回につき約200人の老若男女が参加し、網につかまっているだけでも報酬を受けられた。この約200人の曳代のうち、約10%は農漁業から退いた高齢者であつた。収益は、見代とトモドリ、押代、漕代を務める網仲間には漁獲高に応じて分配され、曳代の報酬は漁獲高に関係なく一律

に支払われた。昭和5年(1930)の南下浦村上宮田のシンアミという網仲間の曳代を例にとると、成人男性が32円、成人女性が半分の16円、子どもがその半分の8円で、成人男女については、帳簿に支払先を記録していた。また、網仲間以外の曳代への参加は義務ではなく、網仲間だけが参加を義務とされていた。

巾着網漁は大地曳網漁よりも新しい漁法で、真網、逆網と呼ばれる2艘の船を1帳として漁を行うものである。巾着網漁は地曳網漁の漁場よりも沖で行われ、曳代はいないものの、大地曳網漁とおおよそ同様の役割分担がなされ、網仲間が組織されていた。主たる対象魚種は、大地曳網漁と同様にイワシであった。大地曳網漁と異なる点としては、漁場が浜辺から遠く、手船で魚群を探すために、手船が2～3艘出漁していた。また、網に付けられる錘が地曳網漁で用いる網よりも軽く、巻いた網の底を縛る潜り手がいた。巾着網漁に際して、北下浦村では地曳網漁と異なる船が使用されたが、南下浦村上宮田では地曳網漁と同一の船が使用されていた。

この地曳網漁と巾着網漁は、もともと和船で行われていたが、大正末期からグローエンジン(焼玉エンジン)による動力船が導入された。南下浦村上宮田では、大正15年(1926)に8馬力の動力船が各網仲間に導入された。当時、これらの動力船は、「キケー船(機械船)」と呼ばれ、手船や網船の引き船としての役割を担っていた。動力船の導入によって漁場が沖合に広がり、まれに対岸の房総半島の漁民との漁場争議も起こった。

2) 近代における漁業形態の変遷

先述のように、近代の下浦地域においては多様な漁業形態がとられていたが、明治期から昭和期の変遷をたどるとその形態は大きく変化している。本節では、近代を通じた漁業形態の変遷を、主に地曳網漁の変化を中心に記述していく(第2表)。

明治期の下浦地域の生業形態は、地曳網漁と巾着網漁によるイワシ漁を中心とし、これらの合間に釣漁などの漁業や農業などを行うものであっ

た。地曳網漁や巾着網漁を行う集団である網仲間については、それぞれの成立年代は不明であるが、明治期には、北下浦村野比に東網と中村網、下網、北下浦村長沢に賀利屋とメイゴ屋、市輔、北下浦村津久井に川尻(旭網)、中小路(徳エむ)、中町(太八)の9か統、南下浦村上宮田に、トゼム、オカメ、タカベアミ(高部網)、シモエム、シンアミ(新網)、モトアミ(本網)の6か統が存在した。このうち、北下浦村長沢の賀利屋と津久井の3か統は大地曳網漁と巾着網漁の両方を行い、その他は大地曳網漁のみを行っていた。一方、南下浦村では、トゼムについては不明であるが、タカベアミとシモエム、モトアミは大地曳網漁と巾着網漁を、オカメとシンアミは巾着網漁のみを行っていた。

近世より、これらの網仲間は株を持ち合う形式で組織されていた。このうち北下浦村の系統の大地曳網漁については、網仲間と集落の範囲がほぼ一致しており、大地曳網漁が「集落行事」的な性格を持ち、生計の中心を漁業におく世帯が網元を務めた。とくに、長沢の系統では、それぞれの網仲間の名称となっている賀利屋やメイゴ、市輔の屋号を持つ世帯が中心となり、津久井の系統では、川尻を旭網、中小路を徳エむ、中町を太八の屋号を持つ世帯が、それぞれ中心的な存在として漁を行っていた。漁場はそれぞれの集落の地先であり、各系統の漁場は親方と呼ばれる網元の協議によって設定され、隣接集落の浜へ入ることはなかった。隣接集落に入って漁を行う場合は、漁獲の25%を現物でその集落に納めた。明治・大正期においては、漁場の境界をめぐる争議はなかったとされる²⁰⁾。大地曳網漁の漁獲による収益は参加したものの全員に分配された。また明治30年(1897)の水産博覧会で、当時の賀利屋の世帯主である長島兼松が、当地域の地曳網を出品し表彰されている。長島善太郎家所蔵の表彰状には、以下のような記述がなされている。

第二回水産博覧会賞状

古来慣用ノ漁具ヲ持続シ常ニ漁利リヲ収ムルコ

第2表 明治期以降の下浦地域における漁業年表

| 年 | 南下浦村上宮田 | 北下浦村 |
|-------------|---|--|
| 明治5 | 上宮田に所有する漁船45艘 | 野比：東網・中村網・下網 長沢：賀利屋・メイゴ屋・市輔 津久井：川尻（旭網）・中小路（徳エむ）・ 中町（太八）の9か統が地曳網漁を行う |
| 明治10 | 東京で第一回内国勸業博覧会 上宮田村はメリヤス・裸麦・火酒浸白豌豆・漁具絵図・漁具図を出品 | 生魚を4斗樽に氷づけにして津久井まで運搬。三崎からの三盛丸（10トン位） に便乗して築地の市場に出荷 |
| 明治24 | 北下浦村船舶数：231 | 北下浦村船舶数：593 |
| 明治29 | 漁業法制定 | |
| 明治30 | | 第二回水産博覧会に地曳網を出品 |
| 明治32 | 要塞地帯法公布、上宮田も入る 軍事施設から450m以内魚・海草採取、船潜、土砂採掘等禁止 | |
| 明治36 | 上宮田漁業組合設立、組合員160人 | 長沢・津久井漁業組合と野比漁業組合 が設立される |
| 大正10 | 上宮田漁業組合、組合員160人 横須賀佐島村でイワシの巾着網漁始まる | 巾着網漁が盛んなときで、煮干・目刺 の加工業者多い。 船大工手舟・網舟、協同して巾着網・アグリ 網舟を制作（大正期～昭和15年頃） |
| 昭和4 | | 賀利屋が定置網を始める |
| 昭和8 | 南下浦村：動力付漁船49、無動力付漁船459 | |
| 昭和10 | 南下浦村：巾着網10船団 | |
| 昭和18 | 水産業団体法により漁業組合を漁業会に改組 | |
| 昭和20 | 野菜魚類公定価廃止、市場セリ売り5年ぶり復活 | |
| 昭和22 | 横須賀三浦観光協会創立 | |
| 昭和24 | 漁業協同組合法の制定（水産業共同組合法） | 北下浦漁業会を設立（3地区一体となる） |
| 昭和24 | 上宮田漁業組合が協同組合となる（組合員160名） 海岸道路工事開始（岩井口から野比へ） | |
| 昭和25 | 上宮田の職業別戸数：漁業126、農業264、その他60、計450戸 上宮田の漁業状況：沿岸定置網漁業22%、沿岸その他漁業10%、沖合漁業 39% 上宮田の漁業者状況：船主経営者2人、網組（共同経営）61人、家族経営 496人、加工業14人、網子・船子・漁夫39人、魚商4人、計616人 | |
| 昭和26 | 下浦海岸に魚の大群が来て大漁 | |
| 昭和26 | 南下浦町：海の家（町営）が高抜で初めて開業 | |
| 昭和29 | 南下浦町の漁業経営体：245体数（個人232、漁協1、生産組合1、共同11） 海岸道路（岩井口～菊名間）工事開始 | |
| 昭和30 | 海岸道路（岩井口～野比）全線開通 改良蛸壺（セメント製ネズミ捕式）の使用開始 | |
| 昭和32 | 東京電力横須賀火力発電所の建設開始 | |
| 昭和33 | 上宮田地先：砂が堆積し海岸が急に広がる。千駄ヶ崎から久里浜湾の 一部埋立てにより海流・潮流が変化したことによる。 | |
| 昭和34 | 上宮田の地曳網・巾着網のタカベアミが廃業、その後別人がタカベアミ の名称を一時使用 下浦海岸の観光客30万人（市全体の16%） | |
| 昭和35 | 下浦海岸の観光客50万人（市全体の13%） | |
| 昭和38 | 上宮田海岸に県営駐車場工事開始 | |
| 昭和40 年頃～ | カツオの遠洋一本釣り漁の生餌として鰯出荷 | |
| 昭和41 | 京浜急行、津久井浜～三浦海岸間開通 三浦海岸民宿組合連合会発足 | |
| 昭和42 | 漁業組合の大規模統合指導 | |
| 昭和45 | 横須賀火力発電所の1～8号機運転開始 | |
| 昭和53 | 上宮田の漁業経営体数36（個人32、生産組合1、共同組合3） | |
| 昭和57 | 上宮田漁業組合員80人（正74人、準6人） | |
| 昭和58 | 吉田・魚伊之・やまきの三漁場が応援旗を上宮田小学校へ8流寄贈 上宮田漁場経営26（内個人経営23）、漁獲量522トン | |
| 昭和59 | 上宮田漁港着工 | |
| 昭和60 | 上宮田漁業組合員80人（正30人程度、うち専業者20人程度） | 長沢の賀利屋、津久井の太八が定置網 に従事 |

（『年表でたどる上宮田』、『北下浦郷土誌』、『明治二十四年徴発物件一覧表』、および聞き取り調査により作成）

ト少カラス是レ其構造地勢ニ適スルニ由ル
明治三十年十一月十一日

博覧会に出品したという事実から、地曳網漁は北下浦村の住民にとって代表的な漁法であったといえ、村外からは地形条件に見合った伝統的な漁法とみなされていた。当時の北下浦村の漁業にとって地曳網漁の重要性の高さがうかがえる。また巾着網漁については、野比の3か統については不明であるものの、賀利屋と津久井の3か統は、地曳網漁と同様に集落を単位として巾着網漁を行っていた。

一方、南下浦村上宮田の系統の大地曳網漁については、トゼム、オカメ、タカベアミ、シモエム、シンアミ、モトアミが組織されていたが、網仲間の範囲と集落の範囲は一致していなかった。上宮田の網仲間では所属する世帯が1年ごとの輪番制で網元を務めた。網元にあつた世帯は、網仲間での寄り合いの場所の提供や出納帳簿などを担当した。漁場の範囲は、北限は北下浦村津久井との境界から、南の南下浦村菊名との境界にある琴根磯までであった。その範囲内であれば、上宮田の各系統はどこでも操業できた。菊名では大地曳網漁が行われておらず、菊名の世帯が上宮田の大地曳網漁の曳代として参加することも多かった。そのため、菊名に許可を受けたくて、たびたび境界を越えることもあった。一方で、北下浦村津久井との境界は厳守された。

明治36年（1907）には、明治29年（1896）の漁業法の制定を受けて、野比漁業組合と長沢津久井漁業組合、上宮田漁業組合が設立された。長沢津久井漁業組合を例にすると、設立当時、1等組合員は1円80銭、2等組合員は80～90銭の出資金を納めた者に漁業権が与えられた。漁業組合の設立は、漁家と農家を明確に分ける契機となり、自作農は農家となり、小作農もしくは、所有農地の多くを小作に出していた農家が漁家となった。

漁獲された魚のうちイワシについては、多くはタキバと呼ばれる加工場で一次加工された。タキバは地元の住民が経営する加工業社が運営してお

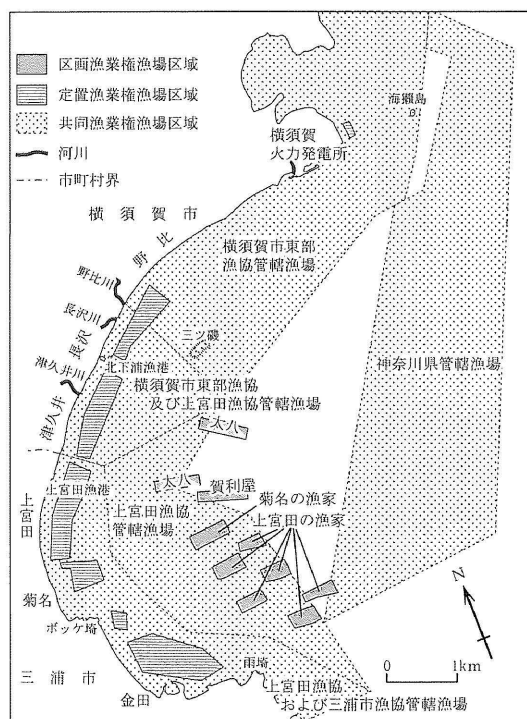
り、中には漁業と兼業する世帯もあった。加工しきれない分については、海岸に直接並べて砂干しをした。第3図で示したものは、大正期から昭和戦前期に営業していた加工業社であるが、イワシ漁は一貫して行われてきていたため、明治期においてもおおそ同様の状況で加工業社が展開していたといえる。加工されたイワシの出荷先については、管見の限り記録は見当たらないものの、近世より浦賀に干鰯問屋が集積していたことから、加工したものは浦賀へ出荷していたと考えられる。

一方、イワシ以外の生魚で出荷されるものについては、明治期から大正期前半までは、三崎共立運輸株式会社の運行する三盛丸（10t級）が北下浦村津久井に寄航しており²¹⁾、その船へ4斗樽に氷漬けしたものを、築地の市場に向けて出荷していた。明治20年代より下浦地域は、タバコやスイカ、ミカンの産地となっており、三盛丸の帰路に運搬される下肥が上記のような作物の栽培に利用されていた。そして大正期後半に、南下浦村上宮田の加工業社で問屋も兼ねていた、ヤマチョー（山長）が10t級の長栄丸を購入し、魚や野菜を東京へ運搬し、帰り荷として下肥を積載してきた²²⁾。これらの他に、漁獲物は漁師が自らの漁船で輸送したり、ボテイと呼ばれる行商人に卸されていた。このボテイは、地曳網漁では曳代を務めることもあった。

下浦地域の地曳網漁や巾着網漁によるイワシ漁は、昭和に入って以降、衰退していった。巾着網漁については昭和10年（1935）までに行われなくなり、地曳網漁については大地曳網漁が昭和30年頃までに行われなくなった。その後も小地曳網漁は行われていたものの、昭和41年（1966）に京浜急行電鉄が津久井浜駅まで延伸された頃には行われなくなった。また、それとほぼ同時期の昭和40年代前半から、観光地曳網が北下浦村津久井の徳エむ、南下浦村上宮田の合同網とマルキョー網の2か統によって操業されるようになった。この観光地曳網は、それまでの大地曳網漁の網仲間とは異なるもので、徳エむについては個人経営で行わ

れ、合同網とマルキョー網はそれぞれ5戸の漁家によって共同経営で行われた。現在観光地曳網は、徳エむは平成15年（2003）頃に中止したが、合同網は5戸による共同経営を継続し、マルキョー網は2戸に縮小しながらも共同経営を継続している。

昭和戦前期に地曳網漁と巾着網漁が衰退し始めた頃に、下浦地域に定置網漁が導入された（第4図）。下浦地域における定置網漁は、昭和4年（1929）に富山県から賀利屋の長島兼松によって導入された。長島兼松は鎌倉師範学校を卒業後、18歳で漁業組合の役員となり、地域の有力者であった。対象魚種については、大地曳網漁と同様にイワシが中心であった。定置網漁は、網元と15～16人の乗り子によって行われた。乗り子の多くは青森からの出稼者で、冬季が中心であった。



第4図 下浦地域における漁業権と漁場利用
（2009年現在）
（上宮田漁業協同組合提供資料および聞き取り調査により作成）

出稼者はもともとニシン漁の出稼ぎに行っていた者が多く、漁の方法は習得していたが、網の作り方や漁場の境界などについては、網元が伝授した。その後、昭和8年（1933）には北下浦村津久井の太八が定置網漁を導入するなど、下浦地域全域に普及していった。第二次世界大戦後には、定置網漁が下浦地域の漁業において中心的な存在になっていた。その結果、漁場の重複する巾着網漁が先に衰退し、その後、地曳網漁も衰退していった。

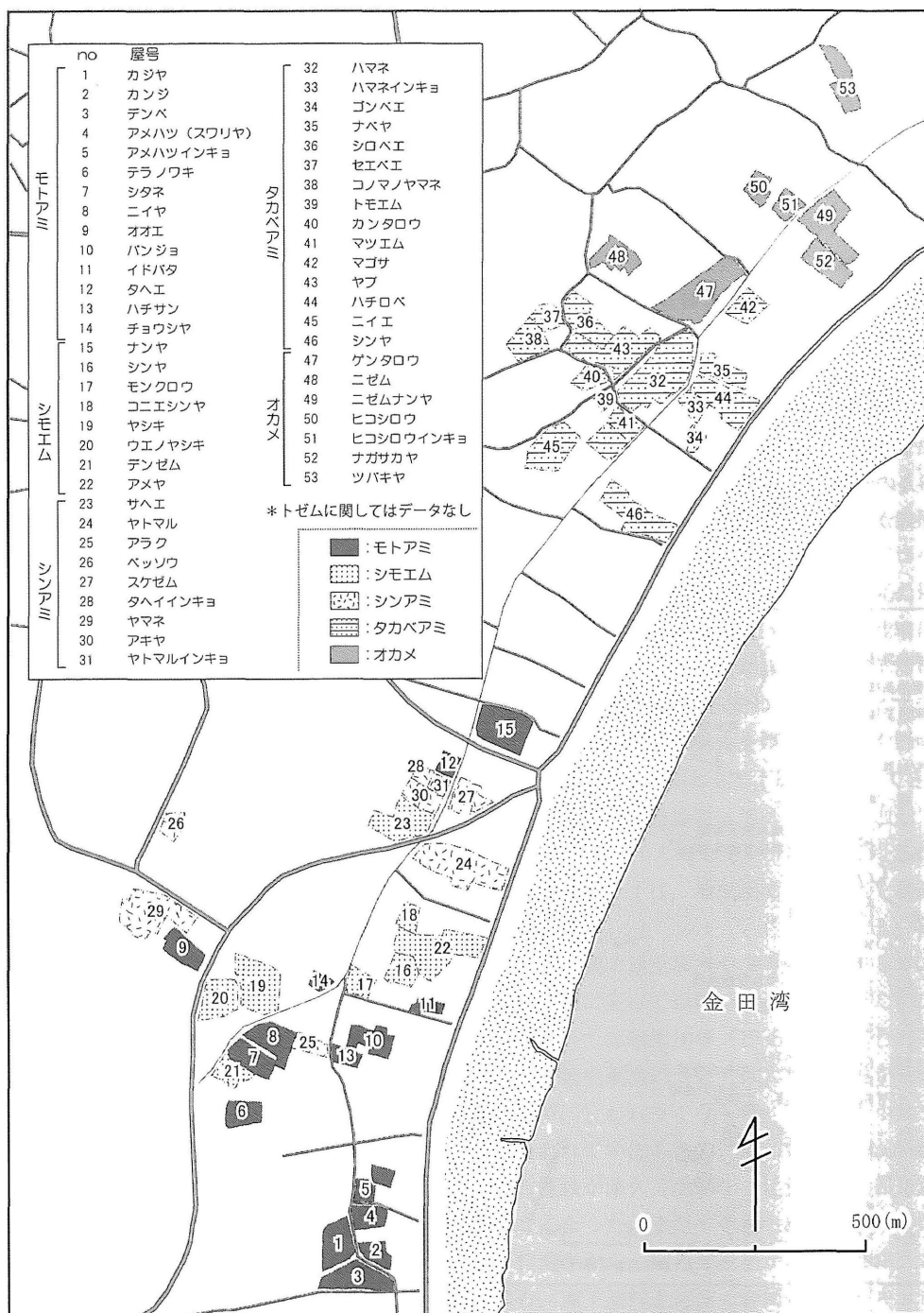
Ⅲ 南下浦村上宮田における網仲間の土地所有と生業形態

1) 上宮田の網仲間

a. 明治～昭和戦前期における網仲間ごとの漁業
本章では、昭和初期の南下浦村上宮田における網仲間ごとの網漁の形態と、網仲間に所属していた各世帯の生業を中心に記述する。

下浦地域における地曳網漁の全盛期は、豊漁が続いた明治中期から昭和初期である。前述のように、下浦地域は海底に根が多いが、上宮田は砂浜に恵まれていたため、網仲間によっては大地曳網漁と巾着網漁を組み合わせた漁業形態をとっていた。上宮田にはかつて6か統の網仲間が存在し、南からモトアミ、シモエム、シンアミ、タカベアミ、オカメ、トゼムと位置していた（第5図）。それぞれの網仲間名は屋号に由来する。

聞き取り調査で得られた5か統の網仲間のうち、大地曳網漁を行っていたのはモトアミ、シモエム、トゼムの3つであり、残りの2か統の網仲間は巾着網漁を中心とした漁を行っていた²³⁾。巾着網漁は5つの網仲間すべてで行われており、シンアミ、オカメ、タカベアミではそれぞれ巾着網船を2艘所有していた。一方、モトアミとシモエムでは、真網をモトアミが、逆網をシモエムが1艘ずつ共有して使用していた。これは、モトアミから分かれてシモエムが独立したことによるという。大地曳網漁には親船と手漕ぎの網船が必要で、モトアミとシモエムとタカベアミが所有していた。



5 か統の網仲間の中で、最も漁を盛んに行っていたのはタカベアミであり、巾着網漁と大地曳網漁に、廻り船漁を合わせた漁を行っていた。廻り船漁は、地曳網漁の魚閑期に東京湾を廻りながら1 か月程度の期間に渡って行われていた漁であり、タカベアミで盛んに行われていた。また、オカメやシンアミは、巾着網漁のみを行っていた。モトアミとシモエムは、大地曳網漁を中心に巾着網漁を補完的に行っていた。

上宮田では「里」と呼ばれる小字単位の集落が漁業やその他の生活において実質的な社会組織として機能していた²⁴⁾。第5図をみると、網仲間の居住地は里ごとにおおよそまとまって存在していることがわかる。モトアミは岩井口里、シモエムは松原里、シンアミは大柴原里周辺、タカベアミは芝原里、オカメは仲今井里、トゼムは今井原里におおよそ位置していた。

しかし網仲間ごとの境界は明確ではなく、とくにモトアミ、シモエム、シンアミの網仲間は岩井口里から松原里にかけて居住地が混在している。よって大地曳網漁における各網仲間は、実質的な生活・社会の単位である里のスケールと一部重なってはいるが、完全に里を単位に営まれていたわけではない。また各網仲間の構成員の中には、婚姻や分家などによる共通の親戚関係にある世帯がいくつか存在しており、地縁的關係に加えて血縁的關係も網仲間の構成単位となっていた。

b. 昭和初期における網仲間の生業形態

次に昭和初期における各網仲間における個別世帯の生業形態について検討する（第3表）。

上宮田でも規模の大きい地曳網を所有し、早くから機械船を導入したタカベアミでは、専業農家が15戸中13戸と大半を占めており、小作のみ、あるいは自作と小作を合わせた農業経営が中心であった²⁵⁾。農家の中で地主も兼ねていたのは、タカベアミ-Oの1戸であり、漁業への依存度の高い網仲間であったといえる。また、農家のうち8戸は小作であった。タカベアミが位置する芝原里から北下浦村津久井への村境にかけては、地割が

比較的狭小で田畑が少なかったことも要因に挙げられる。

もうひとつの特徴として、土地所有の大小に関わらず、いずれの網仲間も廻り船漁に出ていることがあげられる。廻り船漁に出ている約1 か月間は、世帯主が農業に携わることはできない。タカベアミに属する世帯の大半が廻り船漁に行っていたことは、漁業で生計をたてる世帯が多く、農業そのものに対して相対的な依存度が低かったことを示している。

次に大地曳網漁を行わず、巾着網漁のみを行っていたシンアミとオカメについて検討する。

シンアミの各世帯の生業は、専業農家5戸、専業漁家が2戸、その他が1戸となっている。専業農家でもシンアミ-Dやシンアミ-Fは経済的地位の高い専業農家であった。シンアミ-Fは上宮田の中でも多数の土地を所有する地主で、約4万m²弱の土地を所有していた。昭和初期の地主にかかる地租は、田租として10aあたり3俵1斗、畑租として10aあたり16円であり、その他の地租（林野、雑地など）や村税が税金としてかかっていた。シンアミではこのような地主階層であるシンアミ-Fに加え、自作地で農業を行うことのできる農家が比較的多かったため、漁業への経済的依存度が低かった。

また、オカメはいずれも専業農家であり、オカメ-D、オカメ-Eなどの地主階層の農家、あるいはオカメ-A、オカメ-Bのように小作に出ない自作農家などで構成されている。農業収入で、ある程度の世帯収入を確保できていたために、大地曳網漁や廻り船漁といった漁を行う必要がなかったと考えられる。

さらに、オカメとシンアミは他の網仲間に比べて設立が新しい。地曳網漁などの集団漁の導入期に、必ずしも漁業収入に頼る必要がなかったことから、直ちに網仲間の設立へと至らなかったことが推測される。

次に、巾着網漁の網船を共同で使用していたモトアミとシモエムの生業形態をみる。モトアミは漢字では「本網」と表記され、上宮田の中でも比

第3表 昭和戦前期の上宮田における各世帯の漁法と生業形態

| 網仲間 | no | 過去の生業形態 | 各世帯の漁法 | | | 備考・現在の生業形態 |
|-------|----|-------------|--------|-----|----------|---------------------|
| | | | 集団漁 | | 個人漁 | |
| | | | 大地曳網 | 巾着網 | | |
| モトアミ | A | 地主 | ○ | ○ | | 地主、昭和初期に網仲間脱退、専業農家 |
| | B | 専業農家（地主・自作） | ○ | ○ | | 地主、専業農家 |
| | C | イワシの加工屋 | ○ | ○ | | 加工屋は昭和初期に閉店、専業農家 |
| | D | 専業農家 | ○ | ○ | | 専業農家 |
| | E | 専業漁家 | ○ | ○ | 小晒網・廻り船等 | 会社員 |
| | F | 専業漁家 | ○ | ○ | 小晒網・廻り船等 | 専業農家 |
| | G | 専業農家（地主・自作） | ○ | ○ | | 専業農家 |
| | H | 専業農家（地主・自作） | ○ | ○ | | 専業農家 |
| | I | 専業漁家 | ○ | ○ | 廻り船 | 会社員 |
| | J | 専業漁家 | ○ | ○ | 廻り船 | 船大工と漁業を生業としていた、会社員 |
| | K | 専業漁家 | ○ | ○ | 廻り船 | 兼業農家 |
| | L | 専業農家（地主・自作） | ○ | ○ | | 農業＋不動産経営 |
| | M | 日雇い | ○ | ○ | | 居住なし |
| | N | 専業農家（自作・小作） | ○ | ○ | | 会社員 |
| | O | 専業農家（自作） | ○ | ○ | | 専業農家 |
| シモエム | A | 農業＋漁業 | ○ | ○ | 廻り船 | 民宿経営 |
| | B | 専業漁家 | ○ | ○ | 小晒網・廻り船等 | 元民宿経営 |
| | C | 専業漁家 | ○ | ○ | 小晒網・廻り船等 | シモエムの船頭（トモドリ）、飲食店経営 |
| | D | 専業農家（地主・自作） | … | … | | 専業農家 |
| | E | 専業農家（自作） | ○ | ○ | 廻り船 | 兼業農家（民宿＋農業） |
| | F | 専業農家（自作） | ○ | ○ | | 会社員 |
| | G | 専業農家（自作） | ○ | ○ | | 元ホテル経営 |
| | H | 専業農家（地主・自作） | … | … | | 専業農家 |
| シンアミ | A | 専業農家（自作・小作） | | ○ | 小晒網・廻り船等 | 会社員 |
| | B | 専業漁家（＋小作） | | ○ | 小晒網・廻り船 | 専業漁家（猪口網の親方） |
| | C | 専業漁家 | | ○ | | 運転手 |
| | D | 専業農家（自作） | | ○ | | 不動産経営 |
| | E | 専業農家（小作） | | ○ | | … |
| | F | 農業など（地主＋自作） | | ○ | | 多角経営 |
| | G | 専業農家（自作） | | ○ | | 元公務員 |
| | H | 日雇い＋軍人恩給 | | ○ | 廻り船 | 居住なし |
| タカバアミ | A | 養鶏＋自作 | ○ | ○ | 廻り船 | 専業農家 |
| | B | 専業農家（小作） | ○ | ○ | 廻り船 | 会社員 |
| | C | 専業農家（小作） | ○ | ○ | 廻り船 | 会社員 |
| | D | 専業農家（自作＋小作） | ○ | ○ | 廻り船 | 八百屋 |
| | E | 専業農家（自作） | ○ | ○ | 廻り船 | 民宿経営 |
| | F | 専業農家（自作） | ○ | ○ | 廻り船 | 専業農家 |
| | G | 専業農家（自作） | ○ | ○ | 廻り船 | 専業農家 |
| | H | 専業農家（小作） | ○ | ○ | | 会社員 |
| | I | 専業農家（小作） | ○ | | 廻り船 | 会社員 |
| | J | 金物屋 | ○ | ○ | 小晒網・廻り船等 | タカバアミの親方、専業農家 |
| | K | 専業農家（小作） | ○ | ○ | 廻り船 | 居住なし |
| | L | 専業農家（自作＋小作） | ○ | ○ | 廻り船 | 会社員 |
| | M | 専業農家（自作＋小作） | ○ | ○ | 廻り船 | 自営業 |
| | N | 専業農家（地主＋自作） | ○ | ○ | 廻り船 | 専業農家 |
| | O | 専業漁家 | ○ | ○ | 小晒網・廻り船等 | 会社員 |
| オカメ | A | 専業農家（自作） | | ○ | | 不動産経営 |
| | B | 専業農家（自作） | | ○ | | 不動産経営 |
| | C | 専業農家（自作＋小作） | | ○ | | 専業農家 |
| | D | 専業農家（地主＋自作） | | ○ | | 地主、公務員 |
| | E | 専業農家（地主＋自作） | | ○ | | 地主、専業農家 |
| | F | 農業（小作）＋漁業 | | ○ | 廻り船 | 専業農家 |
| | G | 専業農家（自作＋小作） | | … | | 専業農家 |

注）…はデータなし

（聞き取り調査により作成）

較的古い網仲間であるといわれている。両者の構成員は、岩井口里と松原里の周辺に分布しているが、明確な空間的境界は認められない。聞き取り調査によると、シモエムという名称は専業漁家であるコニエという家の屋号から派生したもので、現在シモエムを構成している網仲間は当初モトアミに所属していた。後に、構成員の増加を契機として、2つの網仲間に分化したといわれている。

モトアミは専業農家が8戸、専業漁家が5戸、その他が2戸となっており、専業農家の中には地主の世帯が4戸含まれている。また、専業漁家が他の網仲間に比して多く、比較的経済的地位の高い農家世帯と専業漁家で構成されていることが特徴である。専業漁家はいずれも廻り船漁を行っており、個人で行う小地曳網漁などを行う漁家もいた。モトアミでは大正15年（1926）前後には地曳網漁を中止し、最後に網元を務めた世帯はカジヤであったという。

一方シモエムでは、専業農家5戸、専業漁家2戸、農業と漁業を行う世帯が1戸であった。専業農家はいずれも小作に出ることなく、自作地のみで農業を営んでいた。これは、モトアミとシモエムが位置する岩井口里から松原里にかけては、比較的地割が大きく、田畑にも恵まれていたことが要因の一つとして挙げられる。

2) 岩井口里における各世帯の土地所有状況

本節では、上宮田にある9里のうち、体系的な聞き取り調査を行うことができた岩井口里における土地所有状況について検討する。

昭和戦前期における、モトアミとシモエム、シモアミに所属する各世帯が岩井口里において所有していた土地の分布状況を表したものが第6図であり、世帯別の土地所有面積を表したものが第4表である²⁶⁾。各世帯の土地所有分布に関しては、清水克志・清水ゆかりが作成した上宮田における明治20年（1887）頃の土地利用図と照合しながら検討する²⁷⁾。

第6図をみると、砂浜から西へ約100m以内の海岸沿いでは土地面積が狭小になっており、とく

に南北を縦貫する道路沿いで面積が小さくなっている。これは主に道路沿いに家屋が存在していたことと、家屋の周辺に細かく分けられた林地や畑地が広がっていたことを示している。

しかし、モトアミ・シモエム・シミアミの各世帯が所有する土地は、海岸沿いよりも西方の陸地へと入った場所に多く分布している。これは網仲間に所属する世帯の多くが専業農家であり、海岸沿いに居住する専業漁家が少なかったことを裏付けるものである。土地は西へ行くほど地割が大きくなり、土地利用図でも確認できるように、多くは畑地と山林であった。また、各世帯の土地所有分布は一部で分散が見られるものの、多くはまとまって存在しており、居住する家屋近辺の土地を中心に農業を営んでいたことが読み取れる。

次に第4表で岩井口里における世帯別の土地所有面積をみると、専業農家では約2,000m²前後、多い世帯で約1万m²前後の土地を所有していたことがわかる。例えば、専業農家であったモトアミ-Gは岩井口里のみで約9,640m²の土地を所有しており、家屋近辺にまとまった土地を所有していた。岩井口里におけるモトアミ-Gの土地は、大半が畑地であり山林面積の割合が少ない。よって自作地における農業経営だけではなく、地主として他世帯に農地を貸し付けることが可能であったと考えられる。一方、同じく専業農家であったモトアミ-Nは、岩井口里において約2,131m²の土地を所有していた。しかし土地は家屋周辺にはなく、南西の畑地に農地を所有していた。モトアミ-Nは、自作地に小作地を合わせる形態で農業を営んでいた。専業農家としては比較的所有する土地が少ないことや、家屋の周辺に畑地が無いことから、小作として他所に農地を借りる必要があったと考えられる。

一方、漁業を専門としていた世帯の土地所有状況をみると、その多くは1,000m²以下であり、農業から得る収入は世帯の総収入の割合の中でも比較的少なかったと推測される。たとえば海岸近くに居住していたモトアミ-Jは、網仲間の中でも大きな専業漁家であり、家業として船大工も経営



第6図 昭和戦前期上宮田岩井口里における土地所有状況
(横浜地方法務局横須賀支局所蔵「土地台帳附属地図」および「土地台帳」により作成)

注1) 面積は第4表に対応している。
注2) 土地所有状況は岩井口里内の所有地のみ。

していた。モトアミ-Jは漁家と船大工としての収入が十分にあったことから、家屋以外に土地を多く所有する必要がなかったことが指摘できる。しかし、専業漁家の中にも、モトアミ-Fやシモエム-Cのように、2,000m²以上の土地を所有しているものもあり、シモエム-Aのような半農半漁に近い生業形態の世帯も存在した。

3) 第二次世界大戦後の生業形態の変化

各世帯の生業形態は、第二次世界大戦後の作付統制の解除、鉄道の開通や第三次産業人口の増加などによって徐々に専門分化していった。昭和戦前期には、網仲間は比較的收入のある専業農家が多かったが、現在でも農業を継続している世帯は、聞き取り調査の中では38戸中16戸である。現在でも農業を継続している世帯のうち、昭和戦前

第4表 昭和戦前期上宮田岩井口里における世帯別土地所有面積

| | no | 過去の生業 | 面積 (m ²) | | no | 過去の生業 | 面積 (m ²) |
|------------------|----|--------------|----------------------|------------------|----|--------------|----------------------|
| モ ト ア ミ | A | 地主 | 4922.71 | シ モ エ ム | A | 農業+漁業 | 1798.61 |
| | B | 専業農家 (地主・自作) | 251.11 | | B | 専業漁家 | 614.03 |
| | C | イワシの加工屋 | 5652.10 | | C | 専業漁家 | 2131.97 |
| | D | 専業農家 | 3947.37 | | D | 専業農家 (地主・自作) | 7241.26 |
| | E | 専業漁家 | — | | E | 専業農家 (自作) | 4199.80 |
| | F | 専業漁家 | 2491.50 | | F | 専業農家 (自作) | 2993.26 |
| | G | 専業農家 (地主・自作) | 9640.60 | | G | 専業農家 (自作) | 1657.80 |
| | H | 専業農家 (地主・自作) | — | | H | 専業農家 (地主・自作) | 88.87 |
| | I | 専業漁家 | — | シ ン ア ミ | A | 専業農家 (自作・小作) | — |
| | J | 専業漁家 | 566.08 | | B | 専業漁家 (+小作) | 965.55 |
| | K | 専業漁家 | 482.51 | | C | 専業漁家 | 1265.45 |
| | L | 専業農家 (地主・自作) | 940.47 | | D | 専業農家 (自作) | — |
| | M | 日雇い | — | | E | 専業農家 (小作) | — |
| | N | 専業農家 (自作) | 2131.97 | | F | … | 11820.30 |
| | O | 専業農家 (自作) | — | | G | 専業農家 (自作) | — |
| | | | | | H | 日雇い+軍人恩給 | — |

—: データなし

…: 不明

(横浜地方法務局横須賀支局所蔵「土地台帳附属地図」および「土地台帳」, および聞き取り調査により作成)

注1) noは第3表に対応している。

注2) 土地所有面積は岩井口集落内にあるもののみである。

注3) 面積は明治期作成の地籍図を画像解析し算出したため, 実寸値と若干の誤差がある。

期において地主あるいは自作農であった世帯は14戸と大半を占めている。地主階層の一部の農家では, 現在不動産経営を営む世帯も数戸存在する。一方で, 昭和戦前期において小作地を含め農業を行っていた世帯は, 現在会社員や自営業であることが多い。こうした農家が農業を継続しなかった理由としては, 農地が家屋周辺になく, まとまった土地がなかったことや, 第二次・第三次産業の発展などが推測される。

その他に漁業を専門にしていた世帯が10戸存在していたが, 現在も漁業を行っている世帯はわずか1戸のみである。元専業漁家の現在の生業については, 会社員が3戸, 自営業が2戸, 農業が2戸, その他が3戸である。もともと大きな専業漁家は網仲間には所属していなかったことや, 水産業の衰退と戦後の三浦半島全体における畑作農業の発展が背景として指摘される。農業を専業としたのは, モトアミ-Fとモトアミ-Kである。とく

に専業農家になったモトアミ-Fは, 過去の土地所有状況を見ると2491.5 m²となっており, もともと広い土地を所有していることが理由として挙げられる。網仲間に所属していた世帯の現在の生業の傾向としては, モトアミとオカメにおいては農家率が, タカベアミにおいては会社員率が高く, シモエムとシンアミにおいては様々な職業が選択されている。これは, モトアミが位置していた岩井口里では田畑や土地に恵まれていたことや, オカメに属していた各世帯は比較的広い土地を所有していた地主や農家が多かったことが一因である。

Ⅳ おわりに

本稿では, 下浦地域において明治期から昭和期にかけて盛んに行われてきた地曳網漁に注目し, 漁業形態の変遷と各世帯における生業形態や土地

所有状況について検討してきた。本章では各章の要点をまとめた上で、地曳網漁が存立しえた社会・経済的条件を考察し、今後の課題を示すこととする。

下浦地域では、多様な魚種が集まる立地条件によって、年間を通じて多様な漁業形態がとられてきた。とくに、近世期の紀州移民によるマカセ網の導入以降、イワシを主要な対象魚種とした網漁を中心とした漁業形態が発展してきた。漁法は、紀州移民が伝えたと言われる旋網と地曳網が併存していた。海底が岩礁や岩であっても操業が可能である旋網と、浜辺に寄せて引き上げる地曳網による沿岸および沖合での漁を行う形態は、近代以降も巾着網漁および大小の地曳網漁に継承されてきたといえる。しかしこれらの漁法は、生業形態が専門分化していった昭和期以降、徐々に衰退していった。巾着網漁は昭和10年（1935）頃、大地曳網漁は昭和30年（1955）頃、小地曳網漁は昭和41年（1966）頃には行われなくなった。昭和戦前期には定置網漁が導入され、昭和40年代には特定の網元による観光地曳網が行われるようになった。昭和期以降、経済的役割の高かった巾着網漁は定置網に取って代わり、農業と組み合わせられ、経済的役割が相対的に低かった網漁は、各世帯の生業形態が専門分化して網仲間が実質的な機能を失っていくなかで衰退していった。

下浦地域において、海底に根の多い北下浦村と砂底の続く南下浦村では地形条件により漁業形態に相違が見られた。また、南下浦村は北下浦村よりも漁業形態や漁の対象魚種が多様であり、漁業の経済的役割が相対的に高かったと推察される。さらに、大地曳網漁についても両者は異なる特徴を有している。北下浦村では網仲間と集落範囲が一致しており、集落の中でも生計の中心を漁業におく特定の世帯が世襲的に網元を務め、「集落行事」的な性格を有していた。一方で南下浦村上宮田では、網仲間の範囲と里の範囲は完全には一致せず、地縁関係および血縁関係で結びついた網仲間を中心として、仲間以外の集落住民や、村外の行商人、潮湯治客などの外部者も交えて地曳網漁

が行われていた。また、上宮田の網仲間では1年ごとの輪番制がとられており、特定の網元は存在していなかった。北下浦村と南下浦村では漁場の境界意識も厳守されており、全く異なる特徴を有していたといえる。

南下浦村上宮田にあった5か統の網仲間は、巾着網漁と大地曳網漁の他に廻り船漁を行うものが1か統、共有する網で巾着網漁と大地曳網漁を行うものが2か統、巾着網漁のみを行うものが2か統あった。網仲間ごとの漁法の違いは、各仲間の世帯の多くが立地する里の土地条件の違いによる耕地可能面積の大小に反映されていた。

また各網仲間の構成員の生業形態の特徴をみると、巾着網漁と地曳網漁および廻り船漁を行う網仲間では、小作あるいは自小作の専業農家が大半を占めており、漁業に対する依存度が高い。一方で、巾着網漁のみを行う網では地主や自作農が多く、設立も新しいことから、漁業に対する依存度は低かったと考えられる。巾着網漁と大地曳網漁を行う網仲間では、地主または自作農と専業漁家の割合にあまり差が無く、世帯ごとに農業および漁業への依存度が異なっていた。このことは、岩井口里における網仲間の自作の専業農家と専業漁家の土地所有面積からも明らかである。また各世帯では、居住地近辺を中心にまとまった農地を所有していた。戦後は不動産経営や観光客向けの民宿経営、会社員など第三次産業従事者が増加し、現在では農業や漁業を専業として存続している世帯自体が減少している。

以下、下浦地域における大地曳網漁の存続条件と衰退要因について考察を加えていきたい。

存続条件の第一に、網仲間組織の構成が、社会関係に基づいていたことが挙げられる。網仲間は漁業以外にも、地縁や血縁を基本とした社会関係で構成されていた。また、網仲間の株は、網仲間の多くを占める農業を主とする世帯の権利として位置づけられていた。北下浦村では漁業を専業とする特定の網元が中心となって経営しており、南下浦村では網元を輪番制にすることにより対等な関係を築いており、所有株による収益の分配が明

瞭であったといえる。また大地曳網漁に要する多くの労働力は、網仲間以外の女性や子供、高齢者、行商人、潮湯治客まで参加できるゆるやかなものであったからこそ確保できたといえよう。

第二に、網仲間がある集落の土地条件と各世帯が所有する土地条件である。Ⅲ章で見たように、同村の網仲間でも狭小な田畑が多い集落の網仲間や、所有する土地が少ない小作にとっては、季節的に回遊してくるイワシの豊富な漁獲量によって得られる多大な収入が重要な現金収入であったと考えられる。

第三に、網仲間では世帯ごとに農業と漁業の割合の比率の異なる経営を行っていたことである。網仲間の中で農業を専業とする世帯は農業に従事しつつ季節的に地曳網漁や巾着網漁を行い、漁業を専業とする世帯は年間を通じて漁業に従事し、イワシの加工場も所有して生計を営んでいた。また網仲間の多くの世帯は農業を主とした経営を行っており、農業を主とする世帯と漁業を主とする世帯のバランスが取られていたと考えられる。こうした収入源となる基本的な生業活動があったからこそ、豊漁不漁による収入の増減が激しく、経済活動としての側面が弱かった地曳網漁が存続しえたといえる。

これらの諸条件によって存続してきた大地曳網漁は、昭和30年代には行われなくなり、昭和40年代から観光地曳網へと姿を変えた。衰退の要因としては、Ⅱ、Ⅲ章で触れてきたように、第二次世界大戦後の作付統制の解除や高度経済成長期の第二次・三次産業の発展、都市近郊畑作地帯化によって生業が分化し、農業を主体として季節的に行っていた漁業を存続しえなくなったことが考えられる。また、昭和40年代に京浜急行電鉄が下浦まで延長されているが、鉄道の延伸は地曳網漁そのものに直接的な影響を与えてはいないと考えられる。例えば、賀利屋は昭和20年（1945）までに大地曳網を中止したが、大地曳網に使用していた網を馬堀海岸に面した集落の漁民に譲っている。早くから鉄道が開通していた馬堀海岸において地曳網漁が継続していたということは、鉄道開通が

地曳網漁中止の直接的な要因になっていなかったといえる。むしろ、大地曳網漁の衰退後に、新たな漁法の一つとして観光客を対象とした観光地曳網が拓かれたと考えられる。

以上、明治期から昭和期にかけて行われてきた地曳網漁に注目し、地曳網漁の実態と網仲間における生業形態および土地所有形態から、地曳網漁の存続条件と衰退要因、下浦地域において営まれてきた農業と漁業の関係について考察してきた。しかし、海流の変化など三浦海岸を取り巻く環境の変化による魚種の変化や減少、定置網漁の導入など全国的な漁法の動向との関係、高度経済成長期における観光地としての発展との関係についてなど、論じる余地が残されている。また各世帯の生業についても、各世帯における農業経営と漁業経営の具体的な様相や、各世帯の家族員の構成や職業など、生業の変遷を緻密に検証することも必要であり、今後の課題としたい。

付 記

本稿の作成にあたり、上宮田漁業協同組合、横須賀市東部漁業協同組合北下浦支所、横須賀市自然・人文博物館より、漁業関係資料のご提供、地元の方のご紹介、また多くの御教示を賜りました。横浜地方事務局横須賀支局には、地籍図および土地台帳の閲覧、複写、撮影のご許可をいただきました。現地調査では、三浦市上宮田の吉田実氏、松原松次氏、上宮田漁業協同組合の鈴木勝善氏、吉田一博氏はかの皆様、横須賀市津久井地区の高橋寛氏、長島善太郎氏より多大なご教示を賜ると共に、ご所蔵の資料の閲覧や撮影のご許可をいただくなど、調査の便宜を図っていただきました。ここに記しまして、心より厚く御礼申し上げます。

なお、本稿はⅠおよびⅣを田村真実、Ⅱを吉田国光、Ⅲを市川康夫が担当しました。また、本研究には平成21年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費：課題番号20521）の一部を使用しました。

注および参考文献

- 1) 三浦海岸は下浦海岸と称されていたが、昭和41年（1966）に京浜急行電鉄が上宮田に久里浜線三浦海

- 岸駅を設けたことから、三浦半島名を冠した海岸名となったとされる。なお、下浦地域は旧北下浦地域および旧南下浦地域が該当する。北下浦村は昭和18年（1943）に横須賀市に編入され、南下浦村は昭和15年（1940）に町制施行、昭和30年（1955）に三浦市に編入されており、現在の住所表記では北下浦村および南下浦村は使用されていない。本稿では、明治期から昭和期にかけての時期を扱うため、当時の行政区域である北下浦村と南下浦村を採用表記することとする。
- 2) ①澤田裕之（1981）：三浦半島における野菜産地の形成と構造，立正大学人文科学研究年報，19，43～59。②斎藤 功・渋谷文雄・池田一雄（1985）：三浦半島における野菜生産の発展と農業経営，筑波大学人文地理学研究，IX，95～124。③生井貞行・原田敏治・松沢 正・山崎憲治（1991）：三浦市における近郊露地野菜生産の成立と農業経営，地理学評論，64A，472～492。④清水克志・清水ゆかり（2006）：三浦半島における野菜生産地域の発展とその歴史的基盤－下浦地域を事例として－，歴史地理学調査報告，12，31～61。
 - 3) 三浦市教育委員会（1989）：『三浦市民俗シリーズ（V）海辺の暮らし－上宮田・菊名民俗誌－（終巻）』，三浦市教育委員会，7～17。
 - 4) ①長島文夫（1993）：マカセについて－上宮田を中心として－，三浦半島の文化 3，46～59。②辻井善弥（1987）：野比村の漁業，年輪，21，26～48。
 - 5) 青野壽郎（1953）：『漁村水産地理学研究 第1集』，古今書院。
 - 6) 藪内芳彦（1958）：『漁村の生態』，古今書院。
 - 7) 柿本典昭（1975）：『漁村の地域的研究－水産地理学への道標』，大明堂。
 - 8) 河原典史（1998）：漁村空間の構成に関する地理学的研究への一試論－地籍図と家屋台帳の利用をめぐって－，桑原公徳編『歴史地理学と地籍図』，ナカニシヤ出版，159～174。
 - 9) 中村周作（2001）：漁業集落の土地利用変化と漁港の発展－宮崎県南郷町目井津地区の事例－，歴史地理学，204，3～20。
 - 10) ①中井信彦（1955）：九十九里浜における地曳網漁業から揚繰網漁業への転換過程，史学，28-2，187～250。②小笠原長和（1959）：近世に於ける関東漁村の特質－房総沿海史料に基づいて，文化科学 千葉大学文学部紀要，1-1，33～40。③菊地利夫（1986）：『続・新田開発－事例編』，古今書院。④荒居英次（1963）：『近世日本漁業史の研究』，新生社。⑤吉井幸夫（1965）：上総九十九里における旧地曳網漁業上・下，社会経済史学，5-7・5-8，838～867。
 - 11) 川崎史彦（2002）：地曳網主による水主の飲酒規制－近世後期における九十九里地域を事例に－，日本歴史，653，54～73。
 - 12) 前掲4) ①。
 - 13) 長島善太郎氏のご教示による。
 - 14) 高橋恭一（1971）：近世以降の三浦半島の網漁業－特に上方漁民による開発，三浦古文化，9，9～27。
 - 15) 前掲4) ①。
 - 16) 前掲4) ①。
 - 17) 安池尋幸（1994）：『日本近世の地域社会と海域』，巖南堂。津久井村は当時の呼称。
 - 18) 地元の言葉で「何でも（ゴロタ）獲る」という意味から名付けられた。吉田実氏のご教示による。
 - 19) 田辺 悟（2005）：『海浜生活の歴史と民俗』，慶友社。
 - 20) 長島善太郎氏のご教示による。
 - 21) 清水克志（2009）：江戸・東京市場への鮮魚供給機能からみた三浦郡松輪村の地域的特質とその変容，歴史地理学野外研究，13，45～76。
 - 22) 前掲2) ④。
 - 23) トゼムは昭和の初めには既に解散しており，聞き取り調査では調査が不可能であったため調査対象から除外した。また，オカメに関してはここに記した他に若干名の構成員がいた可能性がある。
 - 24) 前掲2) ④。
 - 25) 漁業にも従事する世帯を専業農家と表記するのは不適當である。しかし話者の認識上，上宮田の網仲間では農業を主たる経済基盤として漁業を行う世帯が多く，ここでは話者の認識に沿って専業農家という語句を用いる。
 - 26) 第4表は岩井口里の土地のみを集計したもので，各世帯では岩井口以外の里や他集落でも土地を所有していた可能性はある。
 - 27) 前掲2) ④，35ページ。